須川地区探訪と小牧山

須川自治会

須川自治会は上田市のほぼ中心に位置するも、山間地であることから市街地への移住が進み、住居戸数の減少と高齢化率の上昇による自治会存続が懸念されている状況です。そんな中ではありますが、自治会存続のため重複する役を受け入れし頑張っています。当自治会には須川池があり昭和28年「全日本ケート選手権」の開催、映画「およう」のラストシーンのロケー地など意外と面白い土地でもあります。この池が今後市民の憩いの場所になればいいと期待しているところです。 上田市自治会連合会 須川自治会 のページから引用

上田市自治会連合会須川自治会のページから引用

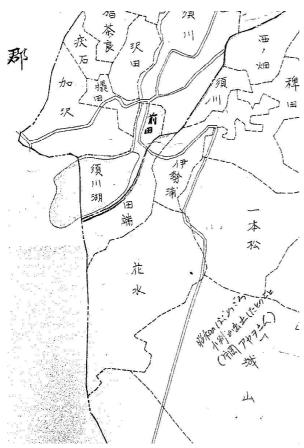
写真は「Google Map ストリートビュー」より

【北沢顧問による追加史料】

慶長6年(1601)、眞田信之が、重臣である大熊五郎左衛門に「小牧69貫文と須川9貫文余りの知行地を与えた」という文書があるため、「須川」という地名そのものは、それ以前からあったことは確かです。この文書が「須川」と言う地名の文書初見と思われます。

須川は元々、諏訪形村の枝村でした。江戸時代中期の安永3年(1774)には須川に組頭を置くことが許可されました。なお、「組頭」とは庄屋の補佐役を勤める役職です。なお、大字小牧地区にも須川の農地があり、農地を持っている人はひとりあたり2升2合の年貢を支払っていました。

その後明治22年(1889)には町村制施行に伴って新たに「諏訪形区」が誕生した際、須川諏訪神社など従来、須川が所有していた土地や建物などの財産の権利について、本区(諏訪形)側にかなり大きく譲歩した、ということもありました。



はっきりとした記録は残っていないものの、須川集落の形成はかなり古い時代まで遡ることができるようです。古くは、須川の集落は現在の場所より尾野山寄り(南寄り)の、周囲が見渡せる高台である「田端地区」または「花水地区」にあったようで、田端地区の「古屋敷」という地籍からは須恵器(主に古墳時代から平安時代にかけて作られた土器)や矢尻などが見つかっています。このことは、ここに有力者の拠点が置かれていたことが推察されます。「はな」は「端」に通じることから、集落からやや離れた場所、または集落の周辺に当たる場所というような解釈もできるようです。

伝わるところによると、鎌倉勢から逃れてきた人たちが住み着いた集落ともされていて、敵が攻めてきたときには早々に逃げ出すことができるように見晴らしの良い高台に住んだ、とも言われています。また、漫画家手塚治虫の祖先に当たるとされている平安時代末期の武将、手塚太郎金刺光盛とその一族に連なる人たちを祖先に持つ方々もおられるようです。

須川集落の花水地籍には「巴御前が花を愛で、花を摘んだ」という伝承も残っているようですが、巴御前については実在そのものも含めて疑問も残ります。このことについては『諏訪形誌Web版』の「上田地域と木曾義仲・巴御前・今井兼平・今井豊成」「今井豊成と荒神宮」などをご参照ください。また、後述の女学生たちが開墾を行ったのはこの花水地籍です。 なお、上の地図は南北がほぼ逆になっています。

今回は行きませんが須川には、手塚治虫や現在須川に住んでいる「手塚」姓の方々の祖先、手塚太郎金刺光盛の一族のものとされる墓塔があります。4基並んだこの塔は手塚一族が春秋の彼岸に先祖祭をする場所です。

手塚太郎金刺光盛は木曾義仲に従った武将で、『源平盛衰記』では「信濃国諏訪郡の住人」と記されていますが、近年の研究では上田市手塚を本拠にしていたという説が有力なようです。 寿永3年(1184)、粟津の戦いで義仲とともに討ち死にしています。

墓塔は江戸時代中期の宝篋印塔(ほうきょういんとう・供養塔や墓碑塔などに使われる仏塔の一種で、中国からの伝来後日本で独自の発展をしてきた塔です。五輪塔とともに平安時代以



降多く造られ、石造の遺品が多く残されています。「100年以上前の先祖を供養するためのお墓」とも言われ、現代でも、特に先祖代々の家系図が残る名家や旧家のお墓、寺院の歴代墓などで、遠いご先祖様の供養のために建てられることがあります。 Webサイト「お墓きわめびとの会」より)で、落人となった手塚家の人々はこれらの塔に「手塚」の名を記さなかった、とのことです。

なお、手塚治虫の『火の鳥 乱世編』で光盛は木曾義仲に「火の鳥が見つかった」と伝えるシーンで登場します。なお、巴御前も登場しています。



お伊勢様

須川地区を一望できる高台に「お伊勢様」と呼ばれる木祠が祀られています 「お伊勢様 (伊勢神宮)」は天上界を支配する天津神の総称です。この神社周辺の水田 (地図上で小字が「伊勢浦」となっている部分) は「伊勢免」と呼ばれ、神社を維持するために租税が免除されていた場所です。

伊勢神社の祠は小さいながら、「棟持柱(むなもちばしら・神明造りで、両妻の側柱外にあって棟を支える柱)」を持つ、しっかりとしたものです。このような構造は本家の(?)伊勢神宮にも見られ、共通性があります。また、「鰹木(屋根の上に棟に直角になるように何本か平行して並べた部材)」が3本であることから、「男神」を祀ったものと考えられるようです。そうであるなら、伊勢神宮外宮「豊受大神宮」と同様、食と産業の神様とされる豊受大御神(とようけのおおみかみ)が祭神であるのかもしれません。

ただし、「鰹木が奇数なら男神、偶数なら女神」という話は俗説であるという見解もあるようです(山梨県立図書館のデータベースによる)。



祠の土台部分には「寛 政四歳(注:1792年) 造之」と刻まれた石が見 られます。また、祠の裏 には大きな岩(縦横16

Ocm×130cm・高さ60cm) もあます。この大岩は盤座 (いわくら・神が鎮座する場所) ではないかと思われます。

この神社のある場所は、上田から丸子方面に通じる古い街道の



すぐ近で、「番屋跡」と考えられている場所にも隣接していることから、交通の要所にあったことが推定されます。この神社は現在でも地域の人々によって大切に守られており、毎年、秋の諏訪神社のお祭りの日に合わせてお祭りが行われているとのことです。



杉の大木に守られたお伊勢様

一方この須川地区には、現在はありませんが過去には地上界を支配する国津神である「諏訪神社」もありました(現在は諏訪形の諏訪神社内に移転し「天神宮」となっています)。さらには、愛媛県に本社がある「大山祇神」を祀る神社もあります。このように、多くの神々を祀る神社が須川のような小規模の集落で見られることはたいへん珍しいことではないかと思われます。

番屋跡

江戸時代、須川は幕府直轄地の天領(尾野山)と上田藩の領地との境に位置していたため 「番屋」が置かれていました。江戸幕府は寛政年間(1789年~1801年)の『武家諸法度』の改正で、諸大名が勝手に関所を作ることを禁じていましたが、藩側も治安上の理由などから関所に相当する施設を必要としており、「関所」の名称を避けて「番所」の体裁で設置したのが口留番所です。この、須川にあった「番所」もこのようなものであったと思われます。

番屋には番人が交代で見張りをしていたのですが、須川の有力農民がこの番人の役割を



務めていたものと思われます。諏訪形の古老の話では「須川には名字帯刀を許された農民が7人いた時期がある」とのことです。また、昭和の末頃までは刀剣類などが保管されていた農家もあった、とのことです。

写真右手の奥に続くのが旧道、右側の坂道を上ったところが「お伊勢様」です。番所があったと思われる場所は左側の竹藪が見えるあたりのようです。

観応の擾乱と須川・尾野山

南北朝時代(室町時代の初期)の貞和5年(北朝の元号。南朝の元号では正平4年。西暦1349年)、将軍足利尊氏とその弟の直義(ただよし)との間で対立が起きました。「観応の擾乱(「日本史上最大の兄弟げんか」とも…)」と呼ばれる戦乱は、この時代の複雑な政治状況の中で、日本全国の権力者や朝廷までも巻き込んで全国に広がり、観応3年(南朝暦正平7年 西暦1352年)まで続きました。



足かけ4年にわたったこの戦乱は、直義の死去によって一応、尊氏側の勝利に終わりました。しかし、その後も対立はくすぶり続け、尊氏の孫、義満が3代将軍につくころにようやく終息しました。こうして室町幕府は安定期を迎えることになりました。

ところで、あまり知られてはいませんが、「観応の擾乱」の古戦場が諏訪形の近くにもあります。

足利尊氏方の佐藤藏人元清という人が書いた「軍忠状(自分の軍功を主君に上申するための書状)」には、「信濃国小県郡夜山(よのやま)中尾で観応3年(1352)12月10日(旧暦)に最大の合戦があった」とあります。小県郡には「夜山」という地名は見当たらないのですが、須川地籍のすぐ隣、丸子の「尾野山中尾」のことではないかと考えられています。この「夜山(尾野山)中尾の合戦」では足利尊氏派(北朝)は信濃の国守護の小笠原政長勢力に対して、足利直義派(南朝)は諏訪直頼、祢津小次郎の信濃武士同士数千騎の戦いとなりました。

「中尾」地籍は尾野山集落の北西一帯にあります。この合戦の時、須川や尾野山の人たちは、両軍の勝ちどきや軍馬のいななきなどを耳にしながら、不安な時を過ごしていたのかもしれません。

参考文献

『上田市誌 歴史編 上田の荘園と武士』

上田市立高等女学校生徒による原野の開墾

須川地籍には、上田市立高等女学校(現在の長野県上田千曲高等学校)の生徒たちが開墾した畑の跡があります。

昭和18年(194s3)6月、政府は「学徒戦時体制確立要綱」を発表し、「勤労動員ノ強化」で食糧の増産のために、荒れ地などを開墾して「報国農場」を作り米、麦、大豆、ジャガイモなどの生産を指示しました。これを受け、長野県では8月に「学徒ました。その中の「女子中等学校報国農場開発計画」を各校に割り当てることとなり1日2坪(6.6㎡)5日間で10坪の開墾が指示されました。上田市立高等女学(現在の長野県上田千曲高等学校)に対しては、13反(約13000㎡)が割り当てられました。

8月19日と20日、上田市立高等女学校の一志教頭、小山農場主任、緑川、遠藤、清水各教諭が現地の調査と測量を行いましたが、現地は殿城山麓の難所で開墾は困難であるという結論に達しました。



そこで、一志教頭の責任で代替え地を探すことになったわけですが、21日には須川地籍の市有林伐採跡地約7000坪(約23000㎡)と、隣接の民有地が利用できることになり、この場所を開墾することになりました。この日の学校日誌には「愁眉を開き前途に希望を持つ」と記されています。8月22日には一志教頭らがさっそく現地を調査し、「眺望絶佳、開墾には好適地」という結論を出しました。また、隣接する民有地の地主高木利兵衛さんの了承を得ることもできて、上田市立高等女学校ではこの場所で開墾作業を行うことになりました。

9月4日(土)には鍬入式が行われ、「上田市立高等女学校報国農場 昭和18年9月4日」と書かれた標柱が立てられました。開墾作業には生徒職員全員が参加し、9月4日から11日までと9月14日から23日まで行われて、完了しました。この間、上田市役所からリンゴ360個、上小地方事務所からはジャガイモ4俵、須川地区からは甘藷(サツマイモ)50貫(約190kg)がおやつとして贈られました。また、砂糖3200匁(約12kg)が特配されました。また、開墾作業に向かう生徒たちを、諏訪形をはじめ地域の人たちは手をふって送り、励ましたとのことです。

開墾された土地で、11月には麦などの作物の蒔きつけが行われ、翌年、最初の収穫として小麦6石(約900kg)、大豆1.6石(約240kg)、甘藷700貫(約2600kg)、ジャガイモ600貫(約2200kg)、栗1斗3升(約23リットル)、そば3.1石(約450kg)などが記録されています。また、昭和19年(1944)11月には農場の横に集納舎が建てられ、農具置き場兼休憩所として利用されるようになりました。

参考文献:『長野県上田千曲高等学校60年誌』

注:『諏訪形誌』には、この上田市立高等女学校生徒らによる開墾作業が昭和19年または20年に行われたように読み取れる記述がありますが、『長野県上田千曲高等学校60年誌』によるものが正しいのではないかと思われます。以下に『諏訪形誌』の記載を載せます。

原野の開墾や食料、生活資材の増産(諏訪形誌』104ページ)

昭和20年(1945)3月には「決戦教育措置要綱、同年五月「戦時教育令」などで、学生等に対しても「食糧増産」や「軍需生産」を最優先としています。長野県は「女子中等学校報国農場開発計画」を発表し、女子生徒に1日2坪(約6.6㎡、5日間10坪(約33㎡)を開墾させる計画を立てました。

当時の上田市立高等女学校(現:長野県上田千曲高等学校)は当初、上小地方事務所から殿城村(現上田市殿城地区)の山林原野が割り当てられました。しかし、教師らが現状を視察調査したところ、この場所は女子による開墾は無理ということで他の場所を探したところ、須川の花水地籍にある市有林約7000坪(約23000㎡)と、隣接の民有地が格好な場所であることがわかり、この場所を開墾することになりました。当時、この場所は樹木が伐採された跡地で切り株は所々にあるものの緩やかな南面傾斜で 開墾には最適な場所でした 昭和19年 (1944)9月4日には、鍬入れ式が行われて「上田市立高等女学校報国農場・昭和19年9月4日」の標柱が建てられました。この標柱は、現在は残っていません。

この開墾地は戦後、須川の人々に私有地として割り振られました。地域の方の話によると「持っている土地が少ない人から優先的に割り振られた」とのことです。途中までではありますが舗装工事も行われ、現在でもその跡が残っています。また、当時植えられたクワが現在では大木となって何本か残っています。

この土地ではまず、薬用ニンジンが栽培されました。その後、ブドウ畑に変わりましたが、現在ではかつての石積みなどが残っているだけで、ほぼ荒れ地の様相となってしまっています。



【コラム 北沢さんがとても残念がった話】



この開墾地の中に、石積みの井戸(写真左)があります。なかなか風情のある(?)井戸で、年代を感じされられるものではあります。

今回のイベントで北沢さんは、参加者の皆さんをこの井戸に案内し「当時の女学生たちはこの井戸の水でのどを潤し、疲れを癒やしたものだろう(なかなかいい話でしょう?)」と話をされる予定だったそうです。

ところが、6月17日の下見で案内してくださった地元の方の話によると「この井戸は戦後になってから畑の灌漑のために作られたもの」とのことで、この話を聞いて北沢さんはガッカリ!!

いい話だったんですけどね。さすがの北沢さんでもそんなこともあるんですねぇ。当日は皆さんをこの井戸までご案内する予定です。

小牧山

どこが小牧山の頂上なのか、地元の 人でもよくわかりませんよね。以前、 小牧の人たちが吹き流しを立てていた あたりが頂上にも見えますが、そこは 石碑が建っている「小牧城跡 下の城」 石碑が建っている「小牧城跡 のすぐ下あたりです。その場所から、 かなり急な坂を上(南)に登っていく と「小牧城跡 上の城(東屋があり、 ものすごく見晴らしが良い!)」を過 ぎ、四等三角点の「尾野山(749. 9m)」に出ます。ここから、なだら かな尾根伝いに西に少しばかり行って 中部電力の「No1O鉄塔」を過ぎたあ たりが標高771.1mの小ピークで、 小牧山の山頂です。ただし、道標も何 もありません。また、見晴らしもほと んどありません。

この「小牧山・東山」方面からの展望がよいウォーキングは、本年の秋に計画(三本松に行ってみたいと思っています)していますのでお楽しみに!



今回は須川の「上田市立高等女学校報国農場跡」入口付近にある、中部電力のNo11鉄塔付近の登山口(上の地図で「駐車場」となっているあたり)から尾野山と小牧山との間にあるコルに登り、これらふたつのピークを歩きたいと思います。

このように書くと、まるで本格的な登山でもやるように読めてしまうかもしれませんが、地図をご覧いただくとわかるようにごくごくなだらかな尾根筋で、登山口から頂上まで10分もかかりませんから、ご安心ください。

ただ、6月17日に下見した段階では登山道が十分に整備されておらず、一部は「藪漕ぎ」状態でした。今後整備されることとは思いますが、一応それなりの服装(しっかりした足回りや長袖の上着と帽子など)が必要です。